

Title	均衡の概念と教育の基礎理論
Sub Title	Le concept d'equilibre et une theorie fondamentale de l'education
Author	井上, 坦(Inoue, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.21- 45
JaLC DOI	
Abstract	<p>Cette these a l'intention d'expliquer que non seulement dans les phenomenes de la nature main encore dans faits de l'homme et de l'education la recherche scientifique naturelle est valable et digne de confiance. Le mot recherche scientifique naturelle ici signifie la generalisation inductive des expreriences, l'operation mathematique autant que possible et la verification des hypotheses ainsi acquises. Comme une tentative exemplaire de cette proposition, j'essaie de montrer en quel degre la theorie de l'education s'eclaircit, si l'on utilise le concept equilibre, qui est dans son origine un concept scientifique et mecanique, au lieu des concepts harmonie,realisation de la liberte ou perfection de la personnalite,qui sont les concepts poetiques ou ideologiques. Dans la pedagogie moderne, le concept du besoin occupait la position centrale et cependant il y avait dans ce concept beaucoup d'ambiguite en concernant son essence et le vrai sens du mot. Je m'efforce ici de sauver la theorie educationelle de la confusion, en regardant le besoin comme l'action de s'equilibrer qui a en soi deux phases i.e. l'homeostasis et l'adaptation. Quand on elargit la notion de l'equilibre du niveau individual au niveau social, on peut posseder la clef valable de connaitre la fonction de la civilisation. La civilisation n'est que finalement un ensemble des modes de comportements sociaux qui sont utiles a la realisation totale du homeostasis et de l'adaptation. Ainsi ccidere le but de l'education consiste a realiser tant dans l'individu que dans la societe l'equilibre le plus durable et le plusalastique possible qui est une condition necessaire du bonheur individuelet, a la fois, de la prosperite sociale.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0021">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0021</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 均衡の概念と教育の基礎理論

井 上 坦

- 一 人間に関する自然科学的アプローチの意義
- 二 調和概念の明確化の必要
- 三 均衡概念の解明——要求概念と関連して——
- 四 文化及び価値の機能性
- 五 文化の意義と教育の目標

本論文の目的は、単に自然界に対してのみならず教育学を含めた人間学一般に対しても、自然科学的アプローチが有効な方途であることを示し、その一つの例証への試みとして、従来、調和、自由の実現、人格の完成等の文学的・観念論的名辞で与えられることの多かつた教育の目標乃至理想を、自然科学的概念たる均衡 (Equilibrium) の概念と置き代えることで、教育の基礎理論がどの程度迄明確化され、非神話化 (Entmythologisierung) されるかを解明するにある。しかし殊に第二の目的、即ち例証の試みに関しては、論述は正に試論的・仮説的性格の濃いものである

ことを予め断わつておく事とする。

以下自然科学的アプローチと呼ばれるものは、自然科学者がその対象を研究する時（例えば流体力学者が流体一般に対する時）に、必ずしも明らかに自覚しているとは限らないが、しかし、常に使用している方法、即ち、諸経験からの帰納的一般化、その結果の可能な限りの数量的処理化、さらにかくして得られた仮説の検証、を指している。無論、これだけの概念規定では科学論プロパーにとつては曖昧すぎよう。だが、本論文の扱う範囲では暫定的な意味ではあるが十分であると考ええる。

### 一 人間に関する自然科学的アプローチの意義

人間及び人間の行為に関して、学的認識は一般に可能であろうか。又、可能とすればそれはどのような接近法によつて可能となるのだろうか。この問は教育学にとつても、根本的な重要性を持つ問である。

一般に、実存哲学、非合理主義哲学と呼ばれるものは、原理的には人間についての学的認識の成立をすべて拒否すると思われている。確かに彼等にとつて、人間は巨大なる謎であり、物質的世界からのみか、他の生命体とも全く異なつた、いわば *ens sui generis* としてある。しかし、徹底的な人間不可知論者といえども、事実上は人間についての何らかの形の一般化された発言をなすことを避け得られない。非合理主義の哲学者も又人々に対して語りかけ、説得する。そして、もし人間が全く非合理的な謎的存在であるならば、一切の論理的な、又意味をもつた交わりは不可能となる筈であつた。

故に、例えば K. Jaspers の如き実存哲学者になると、もはや人間のすべてが謎の中にあるとは説かない。Jaspers

は人間存在を、*Dasein*, *Bewusstsein überhaupt*, *Geist*, *Existenz*, の四つの階層に分ける。そして *Dasein* としての人間には他の生命体一般に関すると同様の生物学的諸法則が妥当し、*Bewusstsein überhaupt* に対しては心理学的アプローチが可能なことを容認し、*Geist* に対してさえも、いわば精神科学的なある種の認識の可能性を説くのである。しかし、*Existenz* としての人間は最深の神秘であり、絶対的不可知性をもつた何かであることを譲らないのである。<sup>(註16 *Passim*・17 s. 381-382)</sup>

このように人間をいくつかの層又は水平面に区切り、下位の層に対しては自然科学的アプローチが、より上位の層に対しては精神科学乃至文化科学的アプローチが可能であるが、しかし、最上位の層（最深の層とも言える）についてはすべての学的アプローチを拒み、たゞ神秘的直観又は一種の啓示のみが近より得る方途であるとする、条件つき不可知論ともいうべきものは、独り *Jaspers* のみならず、*N. Hartmann* の如き存在論者<sup>(註16)</sup>、*M. Scheler*、又ネオ・トミズムの流れを汲む形而上学者達<sup>(註23・31・33)</sup>、さらに、*P. Tillich*、*E. Brunner* 等のプロテスタント神学者等が共通に採用するところであつた。

しかし、何故に自然科学的アプローチは彼等のいう最下層にしか適用されないのか、又精神科学的アプローチは最深層、最高層に迫まることはできないのか。そもそも、彼等の設定したヒエラルキーはいかなる原理と根拠の上に可能となつているのか。こう問うてみる時、かかる多階層論の根拠や原理自体はかなり曖昧かつ薄弱なものであることが、おのずと判明して来るのである。

故に当然次には人間を大きく二つの局面又は層に区分し、一つの局面は自然科学的アプローチの有効な、又それ自身自然科学的諸法則の下にある所の、一般的・非個人的・価値無関係的な世界であり、他の局面はこれに対し一回

的・個性的・価値関係的なものである故に、自然科学的アプローチとは異質的な文化科学的アプローチのみが可能であるとする立場が生じてくる。このような立場、いわば人間と社会に関する「二局面理論」ともいうべき立場の哲學的基礎は、W. Windelband、<sup>(註41)</sup> H. Rickert <sup>(註30)</sup>らの新カント学派により与えられ、二十世紀前半の社会学、歴史学、教育学において、もつとも有力な流れであったといえよう。A. Weber、<sup>(註26, p. 248-251)</sup> F. Troeltsch <sup>(註22)</sup>初期のK. Mannheim、<sup>(註43)</sup> F. Znaniecki <sup>(註43)</sup>等の社会、歴史学者には勿論、さらにE. Sprunger、W. Dilthey、H. Bergsonなどの一般的には生の哲学の中に数え入れる人々に対する影響もかなり深くかつ大きかったと考えられよう。

しかしながらこの二分法の根拠は果して確実な、強力なものであろうか。現在遂行されつつある、<sup>(註50, 51, 52)</sup> 生物物理学、<sup>(註37, 42, 50, 51)</sup> 生理心理学、<sup>(註32, 38, 39)</sup> 電子工学、<sup>(註5, 32)</sup> 通信理論、統計力学の飛躍的發展は、正にこの如き「二局面理論」又は「二階層理論」の原理的薄弱さを、具体的事例をもつて示しつつあるように思われる。勿論、上述の諸科学の成果を総合しても、未だ人間、社会に関して十分な統一理論を形成し得るには程遠いものがある。しかし、たとえ現在猶々の部分が既知領域より巾広いとしても、既知の領域は確実に増大しつつあり、しかも、その有効性は現実に検証されているのである。自然科学的アプローチは決して絶対的解決をもたらさしはしまい。しかし、人が振り返つて、それでは他に果して有効なアプローチがあり得るのかと反問する時に、おのずとこれに立ち戻らざるを得ない意味での、もつとも確からしき方途なのではあるまいか。<sup>(註27, p. 3-64, 243ff)</sup>

以上述べ来たつたことは教育学の学的根拠についても同様に適用されよう。教育学が真に学的性格を保持せんとするならば、その用いる方法及び立つ立場としては、今迄に述べ来たつた意味での自然科学的方法及び立場によること  
が、もつとも確実でもありかつ有効でもないだろうか。K. Popper 的な表現をもつてすれば、教育学も又 piecemeal

human technology (註26 p. 93B) として、遅いが確実な歩みをなすべきであろう。(猶ここに前述の「二局面理論」の他の解決を唱えるもの) *Phänomenologie* が存すること、しかし、現象学的方法は *E. Husserl* (註15) のもつ観念論的、本質主義的困難性はしばらくおくも、しばしば単に現象を並置し、分類するのみという学問以前の立場に逆行する傾向を有することを指摘しておくのは無駄ではあるまい。「何々に関する現象学的考察」なる題又は内容を持つ論文の多くはかゝる欠陥を有しているように思われる。現象学は学の出発地点ではあつても到達目的地ではあり得ないことが批判されねばならない。

## 二 調和概念の明確化の必要

次には一般に自然科学的概念を教育学において使用することが、どの程度に教育に関する言語 (*language of education*) を曖昧さと不明確さから救い出し、教育学の理論的發展に役立つ得るかを均衡という概念の導入において試みてみることにする。

古来教育の理想又は目的として、調和ある人格、あるいは人間の調和のとれた完成、(註47 p. 21-22) があげられるのは珍らしいことではなかつた。既にピタゴラス学派は宇宙及び人間の根源と目的とを *armonia* (註47 p. 21-22) においた。無論この場合意味されたものは実体化され、具象化された零以上の自然数について考えられた神話的概念にすぎなかつた。プラトン及びアリストテレスもそれぞれに人生の目的即幸福 (*eudaimonia*) 即善 (*agathon*) の見地に立ち、プラトンは全く靈魂のみを重んじ、さらに靈魂を上層たる *noyettikov*, 中層たる *duoietikov*, 下層たる *erthuyttikov* の三部分に分け、この三層が調和をとつて活動するところに幸福即ち人生の目的を見出し、(註47 p. 124ff. 8 p. 134) アリストテレスも略それに似た区分の能力の調和を中

庸 (*Lebens*) と名ずけて、幸福の必然条件たる徳 (*Goeth*) の核心とした。<sup>(註1・47 p. 188B)</sup> だがこの二人にあつても猶、これらの論は辛うじて神話的色彩を脱したにとどまる程度であつて、非実証的な、空想的な文脈の中に浮遊しているにすぎなかつた。

近代思想はその新古典主義及び新人文主義 (Herder, Goethe, Schiller, W. v. Humbolt) における教養の理想において再び調和、完成の概念を教育学上に持ち来たつた。だがそれらもギリシヤ思想を範とし、ドイツ・イデアリスムスの伝統的雰囲気の中にあるものとして、必然的な制限と偏向を有し、意識的に自然科学的アプローチに反撥するものであつた。J. H. Pestalozzi や F. Fröbel らの思想的・実践的活動の偉大性は認めるも、彼等の理論の純粹学問的見地よりする不完全さ、未熟さを現代の教育学者は見逃すわけにはいかないであろう。<sup>(註3)</sup> これらの新人文主義者、教育思想家らが調和と言ひ、完成という時、極めて曖昧な漠然たるイメージを伝えうるのみで、精密にそれがどのような状態であるのか、従つて又すべての人がそれに達し得る為の具体的な指示は何かについては、極めて素朴な解答が厳密的とは限らない体験と観察に基いて、むしろ情緒的に語られているにすぎないのである。

現代の教育学はこのような詩的雲霧を吹き払つて、実証的・帰納的・数量处理的な操作、即ち自然科学的操作の光りを調和概念にも投射しなくてはならない。それはまず第一段階としては調和の代りに均衡 (*Equilibrium*) なる概念を置換することにより、調和という言葉の伝統的使用の中に混じている、諸種の曖昧化を惹起する要素を排除して、統一科学の文脈内に位置し得るような、少くともそれへのオリエンテーションを保持し得るような明確化をなすことである。言語を変えるということはこの意味では決して些細なことでも、無用のことでもない。J. Z. Young は、人間の脳的作用を研究する生理学の言語を、たとえ数学の形式でなくとも「通信」技術の言語に変えることによつて、

ある種の非常に困難な問題にも打勝つために、大いに役立つことは確かである。<sup>(註42 p. 182-190)</sup>述べている。この論文においても数学的分析迄は行われぬにせよ、しかし、それでも猶、M. Weitz のいう真の哲学的分析としての *real definition* への数歩ではあり得るのである。<sup>(註49 p. 249-283)</sup>

### 三 均衡概念の解明——要求概念と関連して——

ある種の存在体系或いは体制においては、攪乱に対して所与の均衡状態を回復しようとする作用が存在している。例えば冷却器内の一定温度の保持作用、テレビの明度自動調節機能の作用、哺乳動物の体温の一定化作用等である。

これらの作用は攪乱の生じた際に均衡を目指して合目的に働く。故に目的追求作用は広義に解すればあらゆる動的均衡系において存するものである。<sup>(註32 p. 35ff. 105ff.)</sup>特に生命体におけるこれら均衡回復指向作用を一般には、反射 (*reflex*)、要求 (*need*) 又は欲求 (*demand*) と名づけているにしても、かく名づけられるものの本質は何ら他の動的均衡系のそれと異なるものではないのである。異なっているのはむしろ機構の複雑性の程度であり、そこに働く均衡回復機構がどれ丈多方面にわたつているかの差異であるといえよう。発達した神経系の機能は正に多様にして複雑な均衡回復作用を営む点にあるといふ得るのである。<sup>(註32・37・38・39・42)</sup>

さて、近代教育学の重要な特徴の一つは児童、生徒の持つ要求及びその調和された満足への深い顧慮にあることは何人も否定しないであろう。Rousseau の *Emile* においてもこの主張は文学的形態の下に現われているわけである。<sup>(註3・s. 59ff. 28)</sup>が、何んといつてもこの関心を学的考察をもつて基礎づけ、いわゆる進歩主義的教育理論を明確化した者は J. Dewey であつた。<sup>(註21 p. 31-84)</sup>Dewey によればすべての認識はたゞ行為への準備としての機能的意味をもつ。Thinking is a instr-



ment to control the environment. (註7 p. 30) しかし行為とは何であらうか。Dewey はこれを need—strive—satisfaction (註7 p. 35 註8 p. 38 註9) のプロセスであるとした。このように行為を支えるものが要求であるとされたのであるが、この理論的根拠よりして進歩主義教育思想は要求こそ児童の全行動、全認識作用を規定し、動かすものとして重視したのであった。

児童の要求を重視し、その満足、調和をはかるということは、それ迄キリスト教の靈肉観やドイツ・イデアリスムの影響下に、人間の本質を何らかの超自然的、超世界的なものとみなす上に立つていた教育理論を、かなりの程度に自然科学的に洗練するという大きな意義を有してはいた。しかし、この場合要求という概念には猶いくばくの不明瞭性や神秘性が残存している。ここではたゞ極めて大まかな生物学的枠が提供されたにすぎない。殊に一面的にプログラムを信奉する一部の進歩主義教育学者の中には、要求概念を絶対化し、神聖化さえしてすべてはこれで解決されるものとする傾向が存しないとは言い得なかつたのではなからうか。Dewey 自身、要求の概念そのものについては必ずしも十分な議論を展開してはいない。例えば彼は “The School and Society” (註9 p. 53—56. 21 p. 45) において、児童の衝動として物を探す衝動、物を作る衝動、会話への衝動、芸術的表現の衝動、というようなものをあげている。しかし、これらの枚挙は厳密な科学的裏付けのないもののように思える。こゝに進歩主義教育は児童の表面的な移り気な願望におもねるといふ批判が理由なきものでもないゆえんが存したのである。真の要求と皮相なる願望とを同一視するところ、常に教育理論の混乱は生じるのである。

そこに要求の間に順位乃至階層を定めようとする動きが起つたのは当然であつた。その二三の例をあげれば、A. Maslow は、(註16) (1) 基本的生理的要求、(2) 安全への要求、(3) 愛情への要求、(4) 自尊心の要求、(5) 自己実現の要求、を示し、(註36 p. 44)

S. Langer は、生理的要求と並んで symbolic transformation の要求をあげて順差を認めず、B. Malinowski は、

メタポリズム  
(1)新陳代謝の要求、(2)生理要求、(3)身体的快樂の要求、(4)安全への要求、(5)運動への要求、(6)成長への要求、(7)健康への要求をあげている。<sup>(註20 p. 91)</sup>しかしこれらの枚挙や順位づけにも必ずしも一貫した理論づけがないように見える。このように様々の要求をあげることが必ずしも要求概念を真に学的に解明することと同一ではないのである。嘗て本能説が陥入つたアポリアに再び要求学説が陥入る危険は大きい。この畏から身を外して、開かれた地平へと進む為には、要求概念を均衡(回復)指向作用というもつとも基礎的な場で捕えることこそ必要と思えるのである。

均衡(回復)指向作用とここでよばれるものは別の言葉では feed-back とか automatic control と呼ばれるものと同じ内容を有するものであつて、その機構の原理に関しては、W. R. Ashby が "Design for a Brain" <sup>(註32 p. 79 # 194 # 36-37)</sup> において、又、N. Wiener が "Cybernetics" <sup>(註32 p. 79 # 194 # 36-37)</sup> において探究し明確化したものである。これらの研究は同時に C. E. Shannon らの開拓した theory of information と連関しつつ、生命体の purposive behavior 又は goal-seeking behavior を equilibrium 又は ultrastability への指向作用として、徹底した自然科学的概念構成の中に持ち来たらさんとしたものであつた。無論これらの探究や試論がただちに生命体の行動、殊に複雑な大脳皮質過程を媒介とする人間行動のすべてについて、微細な点に迄行届いた説明をなし得るわけではない。純粋に生理学的立場、分子生物学(molecular biology)的立場よりのアプローチの成果が、サイバネティック的アプローチの成果と照応し、相互に support し合うと言ひ得るには未だ遠いものがある。<sup>(註50・51)</sup>しかしこれらの理論が人間の営む論理的思考そのものの本質的要請に適合している故と、すべての科学的な探究のよらざるを得ない、思惟方法と実験観察の一義的な結合を、現状ではもつとも明確に示している仮説なる故に、生命論、人間論さらには教育論においてさえも頼り得るところの、蓋然性強き理論枠を提供すると考えざるを得ないのである。

これらの理論によれば、生命体の行動はどのような機構と形成過程をもつてであろうか。一例を示せば、たとえば生まれて間もない幼児は殆ど睡っているが、W. G. Walter によれば睡眠中の脳が規則正しく大きな脳波を発していることから、脳細胞はある微妙な均衡状態にあることが判る。この状態は体内か体外かの刺激受容器から impulse が届くと攪乱され、そこに以前の均衡を回復しようとする活動が生じる。この時の活動のパターンは何らかの痕跡を脳細胞に残す。この痕跡は再び同様な刺激が到達した時に以前の活動を生じさせる照合の機能をもつ。こうして脳神経細胞は序々に自己の作用のパターンを獲得し、神経活動の規則を均衡回復への有効性という方向に沿うて形成していく(註42 p. 88-37 p. 118-128, 182ff)と考えられる。かくして、人間を含めてのあらゆる生命体の要求及び行動が、等しく根本的には均衡回復を指向する意味で目的であることを一応認めた後で、しかし、この本来同質的な均衡指向作用が、同様に根本的には同一な情報伝達機構によりつつも、猶便宜的には二つの局面に区別し得る面をも有することを述べたいと思う。その一つは生命体内部における均衡(回復)指向作用としての Homeostasis であり、他の一つは外部環境一般に対して生命体に関係するところに働く均衡(回復)指向作用としての Adaptation であると言えよう。

生命体内部における均衡回復作用を Homeostasis と名ずけて明確化したのは W. B. Cannon (註32 p. 26) であるが、しかしこの作用の存在そのものは以前から注意されていた。そして生命体内部に働くこの精密微妙な作用に驚嘆した人々の中にはこの作用をもつて生命体独自の原理と考える者もあつた。この判断が正しいか否かは別として、いかに素朴な形態であろうとも生命の存するところ必ず Homeostasis が存在することは疑えない。しかし攪乱作用は常に変化してやまない外界の刺激によつて来たるものである故に、内部に Homeostasis として働く均衡回復の作用は、同時に外部に対しては刺激に対する反応として現われざるを得ない。しかしてかかる反応の指向するところは当然に Hom-

costasis を支持し強める方向、即ち生物学的・心理学的に Adaptation 乃至は Adjustment と呼ばれている方向にあるであろうことも言い得よう。生命体の示すあらゆる行為はもつとも素朴かつ単純な反射反応より複雑、高級な知性的行動にいたる迄、すべてかかる意味での適応機構の現れに他ならない。J. Piaget はこの間の事情を述べていう。知覚であれ、感覚運動的学習であれ、認識作用であれ、推理作用であれ、すべて結局は何らかの仕方において、環境と生命体との間の関係に△構造▽を与えるものなのである<sup>(註24 p. 3-20, p. 16)</sup>。そして Piaget にとつて構造とは正に均衡形態そのものに他ならないのである<sup>(註25 p. 18)</sup>。

従来古典的哲学説は人間を精神と身体の二元性においてとらえると共に、認識に関しても理性認識と感覚又は知覚認識を峻別し、人間教育の方法及び目的をもこの見地より思索していた。しかも上述のように理性(知性)は決して感覚や知覚と全く異なる性質、機能をもつものではない。これらのもの間にある差異は結局は複雑性、可塑性の程度の違いにすぎないとすれば<sup>(註53)</sup>、教育方法及び目的についての立場も改変されなくてはならないのである。今少しく知覚的反応と知性的行動の機能的連関について述べれば、知覚レベルにおける均衡は知性レベルの均衡に比較して安定度が低く、非永続的で、その抵抗力は弱い。逆に知性レベルの均衡は生命体の凡ゆる均衡の中で最高の弾力性と安定性を実現している。本能的レベルの均衡はこの両者の中間に位置するとも考えられる。別の表現をすれば、知覚レベルにおいてはそこに關係する変数の値が変化する度に、均衡が破れやすい脆弱性を示すとも言える。Piaget は故に知覚を部分的均衡、知性を可動的乃至多音階的均衡 (equilibrium mobile ou polyphonique) と名づけている<sup>(註25 p. 87-89)</sup>。Piaget のいわゆる operationalisme が一般的に認めらるべきかは疑問としても、上述せる如き知覚及び知性についての論述には聞くべき所があると考えられよう。知性レベルの均衡はしかし經驗的に学習されなくてはならないとい

う点をその力動性と弾力性の代価としてもつている。これは又大脳皮質の高度の複雑化が行動の高度の可能性を許していることと呼応するのである。より未発達な神経組織にあつてはその行動の型はいわばつくりつけの固定性をもつ代りに学習の過程は短かくかつ意義が軽い。しかし人間の脳の如きものにあつては、行動の型そのものを学習せねばならず、学習過程の意義は誠に重要なものとなるのであり、人間はただ学習を通じて、可能性として与えられている高度の均衡を実現することができるのである。

#### 四 文化及び価値の機能性

これ迄論じて来た限りでは人間は個体としての生命体としてのみ把握され考究されている。しかし人間の人間たるゆえんは社会生活を営む所に存し、文化の流れに浸るところにある。文化と社会を離れて人間を論じるのは現実の人間をではなく、抽象的な非現実的人間を論ずるにすぎぬとの批難が生じるかも知れない。故にこれ迄個体としての人間の行為について解明して来た均衡指向作用の概念が、社会、文化という巨視的な問題についても果して何処迄有効性を持つかを検討してみなくてはならない。そうしてこそ教育の基礎理論についての省察も一応の完全性を得ることができるのである。

実は既に試みられて来た理論枠において従来の文化、社会理論のいくつかに対して批判的とも言い得べき方向は設定されていると言える。批判されるであろういくつかの文化、社会理論とは、例えば文化科学と自然科学とを質的に區別し、文化を自然科学的原理の外に立つものとする、F. Znaniecki の “Cultural Sciences” における理論であり、象徴作用を生命体一般の有する要求から原理的に分ち、Sign と Symbol を別次元に属すると看做す S. Langer の

の“Philosophy in a New Key”の象徴理論であり、同様に Sign 又は Signal と Symbol の区別から、文化と歴史の本質を超越的に論じる E. Cassirer の“An Essay on Man”における人間論であり、あるいは又、Kulturbewegung と Civilisationsprozess とを厳格に別箇のものとし、両者は「全く異なつた発展の形態と法則とをもつてゐる」となす。A. Weber の“Prinzipielles für Kultursociologie”における文明理論等である。

右にあげた四つの学説は無論細部においては様々の差異と対立を示しているのではあるが、しかし、一貫する共通の根本仮定を有している。その根本仮定とは学習能力、推理能力、会話能力を含めた人間の精神的な能力は、他の身体的な能力とは全く別箇のものであるとし、それと連関しつつ、人間の扱う価値を先験的所与と考え、価値をも経験發生的に分析することを拒否することである。ここから当然、一直線的・累積的に進化し、自然的過程と連関する Civilization と Schöpfung, Ausschließlichkeit, Einmaligkeit を本質特徴とする Kultur との区別という暗黙の共通性も出てくるのである。しかしこの根本仮定の根拠をさらに問うてみる必要があるではなからうか。Langer は The Logic of Signs and Symbols なる章において、サインとシンボルの区別を確立しようと試みた。彼女によるとサインとは事物、事件、条件の過去、現在乃至未来における存在 (existence) を indicate するものであり、サインと対象との論理的関係は非常に簡単なものである。即ち one-to-one correlation のみがある。その機構は conditioned-reflex arc の次元内にあると彼女<sup>(註19 p. 45-48)</sup>は考へる。しかるに他方彼女によると symbol は対象の存在をも、それに対する適当な行動をも呼起すものではない。シンボルは正に対象の概念化の手段 (vehicles for the conception of objects) であり、事物、事件について語る為 (to talk about) のものなのであるとする。そしてサインからシンボルへの道は連続的・社会進化的なものではなくて断絶があるとするのである。<sup>(註19 p. 32, 49)</sup>しかしでは概念化とは何か、「について」語るとは

何か、どうしてそれらの作用をサイン作用の複雑ではあるが機能的には同質のものと考えてはいけないのかに關しては、説得力が薄弱に思える。Langerはシンボルをサインから質的に分つ根拠の一つとして、抽象作用 (abstraction) を考えているが、抽象作用は決して古典哲学が考えた如く独り知性的レベルにのみ属するものではなく、いかなる知覚にも反応の類化という形で含まれているものであろう。従つてサインも又最少限の抽象作用を必ず伴つている。他方又シンボルにも高度の抽象作用に応じるものと、比較的低度の抽象作用に応じるものが存する以上 (たとえば言語における具象名詞と性質形容詞の如きものを想起せよ) サインとシンボルの差を抽象作用の介在の有無に置くことは困難に思える。むしろ同一の發展線上に位する連続的なものとみなすべきではなからうか。又 Langer がサインは行動に呼掛けるがシンボルは行動に呼掛けないで、語る為の手段だけであるとする区別も決して簡単に受入れられるものではない。この区別は知性の本性も又深く行動的であるとすると現代心理学の最大公約的主張と容易に調停し難いであらう。知性作用が知覚作用の中から後天的に次第に発生して来たごとくに、シンボルも又サインの中から様様の過程の繰返しの中に次第に形成されて来たとみるべきではなからうか。語るといふことが既に働きかける行為の中に生じて来たことは、原始民族における言語の呪術的性格がこれを示している。もつとも高度なシンボルである言語も又、本来的には行為の為の一種の道具であり、他者に適切な反応を起させて自己の行動をより有効にするという性格のものなのである。こうして Langer が彼女の理論の基礎におく symbolic transformation への要求の独自性は、決して確固たるものとは考えられないのである。

E. Cassirer の上述書においても、この重要な問題については曖昧でかつ比較的短い考察しかなされていなく、サインとシンボルの絶対的区別が人間論、文化論の根基をなしているのである。彼はいう。「人間の機能的領域

は単に量的に拡大されているばかりではなく、又質的变化をも蒙っている。人はいわば彼自身を環境に適應させる新方法を見出した。あらゆる動物の種において見出されるところの受容器系 (receptor system) と効果器系 (effector system) との中間に、我々は人間にあつては第三の環を見出す。それを我々は symbolic system と記述してもよいだろう。この新らしい獲得は全人間生命を変容させる。他の諸動物と比較して言えば、人間は単に面積のより広い現実に生きるのみでなく、いわば新らしい次元の現実に生きるのである」と。(註9 p. 42-43)そしてシンボルとシグナル又はサインとの區別については「シグナルは物理的な存在の世界の一部であり、シンボルは人間的な意味の世界の一部 (a part of the human world of meaning) である。シンボルは決してシグナルに還元し得ない。」(註6 p. 51)とし、Pavlov の実験はただ間接刺激又は代理刺激にも動物は反応行動を起し得ることを示したにすぎないとする。しかしシグナルも代理刺激として既に単に字義通りの物理的世界の一部ではなく、ある種の意味の世界に関係しているのである。間接刺激に反応行動をし得るといふ点が重要なのであつて、ここではやはり間接刺激としてのシグナルは機能的価値をも有しているのである。Cassirer は *はやくら* K. Goldstein らの前脳葉障害者の行動についての研究を引照して、患者の一般的概念による思考の欠除が又人間行動の全体的性格を変化させる、故にシンボリズムは人間生活を生物学的必要と實際的関心の枠から超越させるものであるとするが、しかしこの Goldstein らの研究こそ逆に、人間にのみ固有と考えられているシンボリズムが、大脳皮質の複雑な発達という生理学的事実と密接に関連していること、さらにその複雑性はしかし、他の動物の組織の複雑性と量的にのみ異なるものであることを示しているのである。J. N. Young が指摘する所によれば、(註42 p. 220)脳というシステムの本質は、(一)活動単位の数膨大である。(二)その一つ一つは単純な形の信号を伝えるにすぎない。(註42 p. 220)(三)単純な信号の混合所がある。(四)ある段階からその前の段階へと、信号を逆に送る feed-back system である。



stem がある。という四点に存するのであつて、これは動物と人間とを問わないのである。

F. Znaniecki の文化科学の概念は価値の理論によつてその独自性と、又同時に困難性をも示している。彼は価値が人間の諸行為にとり不可欠の component であることを強調すると共に、価値は文化的所与として、自然的現象に還元し得ないことを主張する。(註43 p. 172-174, 188-189)従つて彼によれば文化は正に自然科学の扱い得ざる領域であり、自然科学と文化科学は正に異質的な学とされるのである。彼はいう。「科学者達は彼等の探究の過程において漸次に次のことを発見した。即ち探究の諸結果はどれ程一貫した、又包容的な形而上学にも還元不可能なものであることを見出したのである。科学者達は又経験的データの間に多数の異なる order が存することを見出した。確かに、科学者はこの発見された又は探究された orders を、相互に組織化することに、ある特定の期間内では成功した。しかし、orders のすべてに logical synthesis を考えることは不可能であつた。科学的探究は多数の異質的領域で遂行され、そしてそれぞれの領域では未発見の order が発見され、やうに一層の specialization が必要となるだろう。他方又たしかに数種の領域に共通な、一般的カテゴリーの order は見出されたし、その結果ある種の systematic order がこれ迄未連関であつた諸科学の間に打立てられたこともある。しかし、この事は何も専門研究家が各個に探究せねばならぬところの各種の irreducible kinds of orders の客観的実在を消去するものではないのである。例えば、生命体の研究に対する化学的研究の拡張は生物学を化学に還元するものではなく、又、一般生物学の発達はあるクラスの生物についての特殊研究に捧げられた特殊生物学の発達を防げるものではない」と。(註43 p. 189)たしかに科学の現段階ではあらゆる領域にまたがり論理的統一を示す法則を見出すことは困難であり、又安易に連関づけられていた諸領域の関係が、研究の発達によつて意外の断絶を含むことが明らかにされたこともあり得た。しかし、科学の発達を大局的に見る時、そこ

にあらゆる研究の必然的前提としてあり、又その故にこそ科学が進歩発達し得たもの、それこそはあらゆる雑多なる現象と多面的な存在領域を貫き制約する所の、可能な限りに統一化せられるべき普遍的秩序への指向ではなかつたかと思われる。K. Jaspers の如く、科学の進歩は存在の諸階層間の断絶を狭めるところか(註17 Bde I S. 18ff)、と考えるのは、偏見でなければ誇張というよりない。

さて Znaniecki はさらに進んで人間に関する統一科学を自然科学的原理の上に築くことを「人間に関する存在論的ドグマ」と名づけ、このドグマは「一人の人間は、その本質が物質的か精神的か、生物か意識ある霊かを問わず、彼がその一部分を形成する全宇宙が orderly system である限り、一つの orderly system を構成している。」とするものであるとし、これを論難(註43 p. 96ff)している。Znaniecki のかかる論旨は早急な一般化と粗雑な空想的綜合化を警しめる点では意義あるにもせよ、醜がえつてみるに、人間を宇宙の component と仮定せずして、他にいかなるアプローチの基盤が可能であろうか。人間存在の特殊性、人間文化の特殊性のみを重んじ、普遍的連関を探究することを放棄する特殊主義、個別主義は、その論理的徹底を追う時遂に学としての自己の存在を否定する点に迄到達せざるを得ない筈であろう。

この Znaniecki の立場は殊に明らかに、Langer や Cassirer が脱け出んとしつつも遂には捕われているところのかの暗黙の前提、即ち人間の *ens sui generis* たること、価値(文化)の超越性の意識を示していると思われる。そしてこの前提は実は Windelband, Rickert らの新カント派においてそれはそれなりに明確化され、論理化された立場に帰するものとみなされ得よう。新カント派的文化科学の理念の根柢薄弱性については、第一章で少しく既に触れたのであるが、ここにさらに Rickert の価値概念に触れてみることにする。

価値こそは彼にとつて文化の核心であり基盤であつた。「一切の文化事象には何かある価値が具体化されている……もし頭の中で文化客体からあらゆる価値を剥がしてしまえば、文化客体も自然となる……故に、価値への関係がそこにあるかないかによつて、我々は安んじて諸科学の客体を二種に分けることができる。」<sup>(註30 p. 41-42)</sup>即ち文化と歴史が自然科学的概念構成の外に超越しているのは、価値が自然科学的概念構成に超越しているからに他ならない。価値は彼にとり先験的規範であり、決して経験発生的、実証的な次元のものではなかつたのである。

しかし、このような価値の概念は今日でも猶強固たり得るだろうか。価値の神秘説は猶存立し得るだろうか。かつては良心も又経験とは独立なア priori な所与と考えられていた。しかし、近代心理学、人類学、社会科学さらに精神分析学の発達は、絶対不変の超越的声と考えられていた良心の声も、実は成長の過程において経験的に環境一般との関わりにおいて形成されて来たものなること、たとえばその際両親の権威が社会の権威の代表として最も有力に働く可能性をもつこと等を次第に明らかにして来たのであつた。<sup>(註11・12・13・14)</sup>人が善という価値をある現象又は事実に与える時、多くはかゝる後天的に形成された良心の声と一致するものを指すのである。無論又一つの面としては彼個人の要求に満足を与えるものでもなくてはならないが、それが社会的規模たると個人的規模たるとをひとまずおいても、いずれにせよ人間のもつ要求との相関において価値が規定され、現象してくることは明らかである。要求なる概念をさらに均衡指向作用と定義すれば、価値はかかる最も基礎的な作用との適合において現出するのである。価値概念を敢えてこのように自然科学的概念構成の領域に含ませる方向づけは、教育基礎理論の展開の上にも又欠けてならぬものであると考えられる。

さて文化的客体の核心であつた価値について上述の解明が施された後では、文化の概念も又当然にそれに伴う変

更を受ける。文化とはかくて人間の基本的要求である Homeostasis 及び Adaptation を十分にかつ永続的に実現させる為の機能をもち、学習という作業を媒介として世代より世代へと伝えられる、行動様式の総体ともいべきものになる。しかして、知性が大脳皮質の複雑化と比例して、目標に対する手段経路の複雑性と可塑性を意味する如くに、文化も又本能に対して、適応への高次の複雑性と可変性を人間に許す。そしてこの最高の例が人間における言語使用に現われているのである。言語使用において適応作用は新しい地平を打開いた。Communication の深い意義はここにこそ見出されるのである。(註32 p. 134-38 p. 85)

文化と文明の間に本質的区別の存しないことは当然推論される。無論言葉の使用上の便宜の為に、文化をもつばら主体的な態度の在り方に関し、文明を対象的に具体的に把握し得る物的成果に関するものと仮設することは何ら防げはない。しかしそれは飽く迄便宜上の区別にすぎないのである。

## 五 文化の意義と教育の目標

文化及び文明の概念をこのように解明したことにより、文化及び文明のもつ積極的意義は同時に明示されている。新カント派とは全く異なつた意味関連においては、正に文化および文明こそ人間的価値の担手であり、基盤なのである。Rousseau, G. Freud らのペンミスチックな文明論は厳しい批判の前に立たねばならないことは明らかである。

周知のように、Rousseau は Emile において自然を讚美し、文明を否定して、教育の目的をもむしろ消極的に、文明の悪しき影響を排除する方向においた。勿論彼の自然概念が決して明確なものでないのに対応して、彼の文明概

念も又不明確であり多義的であり、時には矛盾にさえ満ちていることは疑えない。<sup>(註48)</sup>彼の文明否定は冷静な学問的判断の結果というよりも、ancien régimeを打壊そうとする(實際的)情熱の現われであり、又その故にこそその影響力は一般的であつたともいえよう。しかし、彼の論述の非厳密性は誤まつた放任主義教育の行われる因をなした責任を逃れ得ないのである。既に論じて来た如く、文明と自然は対立概念でも、分離可能な概念でもない。文明こそは拡大され、整備され、より有用となつた自然に他ならないのであるから。故に Rousseau は自然に帰れと呼ぶ代りに、厳密に言えば、より有効な文明を創造せよと説くべきであつた。

同様のことは Freud にも当てはまる。Freud は文明をみなして根源的リビドー(即ちこの場合は性衝動)を抑圧する機構となした。父親の姿をもつて代表される社会の姿は、Super-ego としての良心の声として自我の願望と要求を常に検閲し、抑圧する。この検閲と抑圧は文明の進歩と共に増大し、人間のリビドーはますます圧迫され、歪曲される。ここに現代文明の宿命的危機が存すると彼は述べたのであつた。<sup>(註13)</sup>

現代文明の一面にはかゝる指摘の首肯される点のあることは否定できない。しかしそれは文明そのものの中に必然的に内含される病であろうか。Freud は個体としての人間の生物学的弱さが、ただ文明によつて補われ得るものであること、さらに、各個人の要求は現代社会においてこそ比較的に平等に満足せられ得る地盤を得たことを軽視している。文明の抑圧的側面は実はあらゆる要求充足が従わねばならぬ経済的な配分の合理性による禁欲のあらわれであり、それ自体自然的なものであるといえる。彼の文明論も又彼が生きた十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのウィーンを中心とした欧州文明の克服の叫びとしては興味があるにせよ、文明全体の意義を論じるには著るしく片よつたものであることは、同じく精神分析学派に属して Freud の無意識の力動性に関する発見を高く評価しつつも、より

社会学的視野に富む・E. Fromm, J. C. Flugel, L. S. Feuer 等が一致して批判する点である。あるいは又 R. Bas-tide の如く、Freud の余りに固定化した生物学的偏向を感じざるを得ないのである。(註12) (註11) (註14) (註13) introduction VII)

しかしすべての道具と同じように、文化にも効率のよい文化と悪い文化とがあり得る。社会制度としての文化を見る場合、当該社会の成員の中の少数者のみが要求の充足を得ても、他の大多数の成員が恒久的な要求不満の状態にあるという社会的不均衡を生ぜしめるような文化は効率の悪い文化といわねばならないだろう。たとえ理想的均衡は一つの極限状態として無限の彼方にあるとしても、文化はそれに向つての *orientation* を把持していなくてはならないのである。

あるいは又歴史的発展段階の一時期にあつては比較的有効だつた行動様式としての文化が、固定化され硬直化して受継がれる中に、他の諸条件の変化の結果その有効性を失い、遂に人間の要求を阻止する軛となることもあり得る。文化や文明が否定されるのはこのような時なのである。これはいわば社会的次元における *Homeostasis* の攪乱に対する社会的抵抗の一面とも考え得るのである。かくのごとく均衡概念は個体としての人間の行動についても、社会と人間の集合体の行動についても、全く同様に適用され得る豊かさを持つている。均衡概念が一般均衡 (*general equilibrium*) の概念としてローザンヌ学派 (M. E. Walras, V. Pareto) の、又、特殊均衡理論としてケムブリッジ学派 (A. Marshall, A. C. Pigou) の理論的基底として、社会経済的現象の解明に有効に使用せられていることはこの実例である。

さて述べ来たつたようにすべての生命体のすべての作用が指向するところは均衡の回復実現にあるならば、学習を

意識的に組織化し、有効化したものである教育作用も、又当然個体的・集合的に高度の均衡実現を指向する作用に他ならない。勿論最高の均衡は理想的極限状態にすぎない。現実には常に変化し、運動してやまない大宇宙の中に微々たる位置を占めるにすぎぬ一遊星上の生命系は、決して目標としての最高の均衡を実現することはできないであろう。ただ比較的、相対的に目標への接近があり、方向づけがあり、実現化の程度があるのみである。そして恐らくこのような均衡へのいくらかの客観的参与に応じて人が幸福と呼ぶ主観的意識状態も生じるのかもしれない。各人の幸福が教育の目的であると定義することは、全く形式的な意味では誤りではない。しかしその場合直ちに、では幸福たる為の諸条件は何かという問が立てられ、その条件の実現が試みられねばならないだろう。主観的・意識的幸福感とは、客観的・現実的・意識下的状態が均衡状態に遠い時、決して持続的・安定的であることはできない。鎖につながれても幸福たり得ると豪語したエピクテトスに対して、現代人は既に余りにも懐疑的であるかもしれないが、その懐疑も理論的に根拠づけられ、定着された時に始めて幸福への有効な指標たり得るであろう。

附記：具体的な事例についての検証がないままに均衡概念の導入による理論的明晰化への試みがむしろ曖昧性を残してしまつた点もあるのは遺憾であつた。より立入つた考究、検証については他日を期したい。

【参考文献】（註を兼ねる）

- 註1 Aristoteles: *The Nicomachean Ethics* (trans. by D.P. Chase, Wolter Scott, London)
- 註2 Bastide, R.: *Sociologie et Psychanalyse* (Paris, U.d.F, 1950)
- 註3 Blättner, F.: *Geschichte der Pädagogik* (Quelle & Meyer, Heidelberg, 1958)

- 註4 Brunner, E.: *Revelation and Reason* (trans. by O. Wyon, Westminster Press, Philadelphia, 1946)
- 註5 Belevitch, V.: *Langage des Machines et Langage humain* (Office de Publicité, Bruxelles, 1956)
- 註6 Cassirer, E.: *An Essay on Man* (Doubleday Anchor Books, 1953)
- 註7 Dewey, J.: *Essays in Experimental Logic* (Chicago U.P., 1916)
- 註8 —: *Humen Nature and Conduct* (The Modern Library, New York, 1930)
- 註9 —: 学校と社会 (宮原誠一訳、岩波、1955)
- 註10 Eisenck, H. J.: *Sense and Nonsense in Psychology* (Pelican Books, 1958)
- 註11 Flugel, J. C.: *Man, Morals and Society* (Pelican Books, 1955)
- 註12 Fromm, E.: *人間と生きる自由* (谷口・早坂共訳、創元社、1955)
- 註13 Freud, G.: *文化論* (ノロイド選集VI、土井正徳訳、日本教文社、1960)
- 註14 Feuer, L. S.: *精神分析と倫理* (鶴見和子訳、岩波、1958)
- 註15 Husserl, E.: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie* (Husserliana Band VI, 1954)
- 註16 Hartmann, N.: *Neue Wege der Ontologie* (Kohlhammer, Stuttgart, 1949)
- 註17 Jaspers, K.: *Philosophie* (III Bde. Springer Verlag, Berlin, 1956)
- 註18 —: *Der philosophische Glaube* (Piper, Nünchen, 1954)
- 註19 Langer, S.: *Philosophy in a New Key* (Mentor Books, 1954)
- 註20 Malinowski, B.: *A Scientific Theory of Culture and Other Essays* (Galaxy Books, New York, 1960)
- 註21 Mayer, A.: *The Development of Education in the 20th Century* (Pentice-Hall, 1949)
- 註22 Mannheim, K.: *Essays on Sociology and Social Psychology* (ed. by P. Kecskemeti, Kegan Paul, London, 1953)
- 註23 Maréchal, J.: *Le Point de Départ de la Métaphysique* (Cahier I—V, Desclée de Brower, Paris, 1944—1949)
- 註24 Piaget, J.: *The Origin of Intelligence in the Child* (trans. by M. Cook, Kegan Paul, London, 1953)
- 註25 —: *知能の心理学* (波多野・滝沢共訳、大修館、1960)



- 註26 Popper, K.: 歴史主義の貧困 (市井三郎訳、中央公論社、1960)
- 註27 Reichenbach, H.: 科学哲学の形成 (市井三郎訳、みすず、1961)
- 註28 Rousseau, J.-J.: ホッーール (全五冊、平林初之輔訳、岩波、1960)
- 註29 Russell, B.: *Mysticism and Logic* (Pelican Books, 1954)
- 註30 Rickert, H.: 文化科学と自然科学 (佐竹・豊川共訳、岩波、1950)
- 註31 Rahner, K.: *Geist in Welt* (Kösel Verlag, München, 1957)
- 註32 Sluckin, W.: *Minds and Machines* (Pelican Books, 1954)
- 註33 Stein, E.: *Endliches und ewiges Sein* (Herder Verlag, Freiburg, 1950)
- 註34 Tillich, P.: 組織神学第一卷・上 (鈴木光武訳、新教出版社、1955)
- 註35 Scheeler, M.: *Vom Ewigen im Menschen* (Verlag, der Neue Geist, Leipzig, 1921)
- 註36 Maslow, A.: *Motivation and Personality* (Harper & Brother, New York, 1954)
- 註37 Walter, W. G.: 生きている脳 (懸田・内蘭共訳、岩波、1960)
- 註38 Wiener, N.: 人間機械論 (池原止才夫訳、みすず、1960)
- 註39 —: サイバネティックス (池原・弥永・室賀共訳、岩波、1957)
- 註40 Weber, A.: *Prinzipielles zur Kulturosoziologie* (Archiv für S. W. und S. P. Bd. 47 s. 13 f. u, s. 22 f. — Deutsches Lesebuch, 河田、1953 以下)
- 註41 Windelband, W.: 歴史と自然科学、他 (篠田英雄訳、岩波、1942)
- 註42 Young, J. Z.: 人間はどのように機械か (岡本彰祐訳、白揚社、1959)
- 註43 Znaniecki, F.: *Cultural Sciences* (University of Illinois Press, 1952)
- 註44 Archaebault, R. D.: 要求の概念と教育理論との関係 (from *Harvard Educational Review* 1952, 長島貞夫訳、アメリカカーナ 1957年10号 p. 32—57)
- 註45 福武直・日高六郎共著: 社会学 (光文社、1953)
- 註46 清水義弘: 教育社会学 (東京大学出版会、1960)

- 註47 松本正夫… 西洋哲学史(慶応通信、1949)
- 註48 村井実… ルソウの自然概念について(哲学、27輯、p. 193—204)
- 註49 永井成男… 分析哲学(弘文堂、1959)
- 註50 北川敏男編… サイバネティックス(みすず、1960)
- 註51 —… 続サイバネティックス(みすず、1960)
- 註52 渡辺、由良、大沢、磯、亀山… 分子生物学(自然16/1、中央公論、1961、p. 11—47)
- 註53 井上坦… 感覚及び知性作用の共通源泉(哲学第39集、p. 53—72)